

吉本ばなな『N・P』の英語・イタリア語訳比較

太田垣 聡子*

The comparison between English and Italian translation of Banana Yoshimoto *N.P.*

Satoko Otagaki*

The novels written by Banana Yoshimoto have been translated into various languages and published in several foreign countries. Comparing the English and Italian translation of *N.P.*, one of Yoshimoto's best-selling novels, by the close examination of the two texts and the original one, we would be able to see how a literary work would be transformed or re-presented in another language. In the English translation, relatively many changes from the original text could be found, such as the eliminations of ambiguous words and phrases, the additions of explanatory sentences, or the transformations of tense and voice, which made it understandable and easy to read for the English-speaking readers. On the other hand, the Italian text seems to have been directly translated from the original one, adopting Yoshimoto's style and usage as it is.

はじめに

本論は、日本文学の外国語への翻訳に関するものである。翻訳は、日本文化が海外に紹介そして受容されるための非常に重要な手段であると言える。近年、日本の現代文学が翻訳によって外国に紹介される例が多く見られるが、中でもその現象に大きく貢献しているのが、村上春樹と並んで吉本ばななの作品だと思われる。彼女の作品は、1990年代初頭以降日本でいくつかベストセラーになり、それらが諸外国でも翻訳・出版された。特に1988年に出版された長編『キッチン』が有名であるが、これは英語、中国語、韓国語、フランス語、スペイン語、イタリア語、ドイツ語などに翻訳されている。このように日本文学が広く世界へと発信されるためには、翻訳というプロセスが重要かつ不可欠である。

そこで、吉本ばななの作品が外国語に移し変えられると、翻訳言語によって違いが現れるのかどうかを検証したい。同じ作品を翻訳するのにも、移し変える言語の文法的特徴や、翻訳者の特性や、その言

語文化圏の背景等によって、違いが反映されるのだろうか。ここで題材として扱うのは、1990年に出版された『N・P』という小説である。前述の『キッチン』は、既にいくつか研究がなされているので、本論では別の作品を取り上げる。検討する言語は、まず世界共通語であり我々に比較的なじみのある英語、そして翻訳をより客観的に分析するためのもう一つの外国語としてイタリア語を選んだ。

ちなみにイタリアでは吉本ばなな的人气が非常に高く、例えば『キッチン』は翻訳が刊行されてから一年近くベストセラーリストに入り続け、作品および作者がほとんどの主要新聞の読書欄に取り上げられるという^{*1}外国人作家としては異例の扱いを受けた。『N・P』は、イタリアでは1992年に翻訳・刊行され、翌年にスカノ文学賞という外国文学作品を対象にした権威ある文学賞を受賞した。^{*2}いまやイタリアでは、吉本ばななといえばエキゾチックなアジア文学という枠を越え若者文化の代名詞になっているとも言える。

* 東京工芸大学工学部基礎教育研究センター非常勤講師

*1 「文学界」1993年8月号（文芸春秋社）pp.130-1

*2 「国文学—解釈と教材の研究」1994年2月号（学灯社）p.111

『N・P』のあらすじ

風美（語り手「私」）は、高校時代、翻訳家の戸田庄司と付き合っていた。当時彼は、アメリカで活動した日本人作家・高瀬皿男の遺作短編集『N・P』を訳していた。一度風美は、庄司に連れられて行った出版社のパーティーで、高瀬皿男の遺児で双子の咲と乙彦を見かけていた。その後庄司は、翻訳の途中で突然自殺してしまう。数年後風美は、ある夏の日偶然乙彦に再会し、それ以降双子との交流を始める。その後間もなく、風美の前に翠という女性が現れる。彼女は高瀬皿男のもう一人の子供で、更には風美が庄司と付き合う前に彼と付き合っていたと言う。風美は翠の不思議な雰囲気惹かれ、彼女とも親しくなる。後に、翠がアメリカにいた頃に実の父親と関係を持ったことや、彼女が現在は乙彦と付き合っていることがわかる。ある日、翠は乙彦の子供を身ごもっていることを打ち明け、皆の前から姿を消す。その後翠から「子供を産んで生きていこうと決意した」旨の手紙が届く。翠と共に夏が去り、皆それぞれの生活を再び始めていく。

翻訳比較

吉本ばななの文体には特徴がある。独特のメタファー、体言止め、説明不足と感じられるほどの言葉の省略などである。そうした要素が顕著に見られる箇所を選び、各言語でどう翻訳されているかを検証する。以下、まず日本語の原文を挙げ、その英語訳とイタリア語訳の該当箇所およびそれぞれの再和訳を並べて比較していく。(引用後の数字は、頁数。)

意識、もしくは訳文の変更

- ① どんなに好きでも決して伝わらなかった。伝えようともせず、伝える術もなく、受信能力もなく、わかりようのなかったもの。(41)

(英訳) 私はどんなに彼を愛しているか言わなかった。伝えようとしなかったし、そのメッセージを伝えたり受信したりする方法も、それを知る方法も存在しなかった。

I didn't say how much I loved him. I didn't

even try to, nor did any means exist for communicating or receiving that message, or for knowing it. (33)

(伊訳) たとえ私たちがどんなに愛し合っている、コンタクトは不可能だった。伝えたいという気もなかったし、それをする方法もなかったし、受信能力も理解する要素もなかった。

Per quanto ci volessimo bene, il contatto era impossibile. Non ci fu nessuna tentate di comunicare, non c'era modo di farlo, nessuna capacità di ricezione, nessun elemento per capire. (36)

自殺してしまった恋人・庄司について風美が回想する文章。原文は「決して伝わらなかった」というように、「何が」伝わらなかったのかは明示されていない。が、英語訳では下線部のように「私が(庄司)に言わなかった」という解釈になっている。イタリア語訳では、*il contatto era impossibile* 「コンタクトは不可能だった」と訳されており、「伝わらなかった」という意味にしている点で、また「私」を主語にしていないという点で、原文に近いと言える。

- ② 彼女の出口のない静けさに答えたみたいに。(86)

(英訳) まるで彼女の圧倒的な静けさに答えるように。

as if in response to her overwhelming silence. (69)

(伊訳) まるで翠の出口のない静けさに答えたみたいに。

Come se avesse risposto alla tranquillità senza sbocco di Sui. (65)

風美が翠という女性と初めて会った場面で、翠の周りの風景を描写した文章。英語訳では「出口のない」という表現を *overwhelming* 「圧倒的な・あらがいがたい」としている。一方イタリア語訳は、原文の字義通り *senza sbocco* 「出口のない」という訳を

当てている。

- ③ この人の発散する濃い色、本人でさえ押し流されそうな、苦しいほどの存在感。(101)

(英訳) 彼女から発散される濃い色、圧倒的な、彼女でさえコントロールできない苦しいほどの存在感。

The dark colors that emanated from her, the overpowering, nearly oppressive presence that even she could not control. (82)

(伊訳) 彼女が発散するあまりに濃い色、彼女自身が流されるほどの強い存在感。

Per il colore troppo intenso che emanava, per la sua presenza così forte che lei stessa poteva esserne spazzata via. (74)

翠の独特な存在感について描写している文章。原文の「本人でさえ押し流されそうな」という箇所が、英語訳では下線部のように *even she could not control* 「彼女でさえコントロールできない」となっている。原文とイタリア語訳は「翠が押し流される」と受動態になっているのに対して、英語訳は「彼女がコントロールできない」という能動態の文になっている点が異なる。

- ④ お願い、詳しく話さないで、と私は思っていた。安っぽいくらいあたりまえに哀しい、内面の物語を。(159)

(英訳) 彼女が哀しく惨めな内面の物語の詳細を並べ始めないようにと私は祈った。

I prayed that she wouldn't start listing all the details of her sad and sordid inner story. (133)

(伊訳) お願い、それを詳しく話さないで、と私は思った。見えすいたくらいあたりまえに哀しい、内面の物語を。

Ti prego, non raccontarmela nei particolari, pensai. Una storia interiore, triste in modo così prevedibile da sembrare scontata. (112)

翠が自分の不幸な身の上を語り出しそうになった時、風美が心の中で語った言葉。これを英語訳では平叙文にしている。I prayed that という強く願う意味の動詞を用いているが、平叙文にすることで原文と語順がかなり変わっている。イタリア語訳は、Ti prego, non raccontarmela 「お願い、それを私に話さないで」という部分を原文の通り文頭に持ってきているので、原文に近い。

- ⑤ ガラスの目。なにものもその形以上にも以下にも映さない、冷たい響きを持つ瞳。(177)

(英訳) 彼女の目はガラスのようで、瞳は冷たく慎重だった。

Her eyes were like glass, and her pupils cold and cautious. (147)

(伊訳) ガラスのような目。なにものも、その形以上にも以下にも映さない、透明な反射の瞳。Occhi come vetro. Pupille dal riverbero puro, che di ogni cosa non riflettevano niente di più e niente di meno della nuda forma. (124)

原文では体言止めを用いて文を細かく切っているが、英語訳の方は「彼女の目はガラスのようだった」と平叙文にしているため、原文の乾いた固い感じが消えている。イタリア語訳は、ほぼ直訳に近い形である。

- ⑥ その人がその人である不幸みたいなもの。(204)

(英訳) 皆、自分自身の地獄を持っている。
everyone has their own private hell. (168)

(伊訳) その人の不幸である何か。

Qualcosa che è la disgrazia di quella persona. (141)

姿を消した翠から風美に届いた手紙の中の文章。英語訳は「皆、個人の不幸・地獄を抱えている」と解釈している。一方イタリア語訳は、意味も言葉使いも原文に比較的添った訳になっている。

- ⑦ 「いっしょに寝てやろうか？」
「こっちの言うせりふよ。」(232)

(英訳) 「一緒にベッドに行ってほしい？」
「ちょっと、それは私のせりふよ。」
“Do you want me to go to bed with you?”
“Hey, that was supposed to be my line.”
(191)

(伊訳) 「君が望むなら、君と寝てもいいよ。」
「私に親切にしようと思ってるなら…」
“Se vuoi, posso fare l’amare con te.”
“Se pensi di farmi un grande favore…”
(159)

小説のラストに近い場面での、乙彦と風美の会話。二人の関係が発展しそうなことを暗示している場面だが、ここではイタリア語訳に変更が見られる。英語訳は原文に忠実に訳しているが、イタリア語訳は下線部のように、原文とは異なる意味になっている。これは何故かという、イタリア語訳を音読すると、“Se vuoi, posso fare l’amare con te.” “Se pensi di farmi un grande favore…”と両者の音が少し似ていることがわかる。つまり、相手の言葉を真似て返事をしているわけで、それが原文の「こっちの言うせりふよ」にあたる、つまり「あなたの言った言葉をそのまま返すわよ」という返事になっていると思われる。ただ、意味は原文と全く異なるので、翻訳者の越権行為と言えなくもない。

言葉の省略

- ⑧ 生まれ育ったところと違う国に住むのはどういう気持ちなんだろう。姉が結婚してからよく考える。その土地に物語の主人公として溶けていくのか、それとも心のどこかでいつか帰ろうとおもっているのか。(108)

(英訳) 育ったのではない国に移り住むのはどういう感じなんだろう、と思った。姉が結婚してからよく考えた。その土地に固有の物語の登場人物になるのか？それとも、心のどこかで故郷に帰りたいたいと思っているの

か？

I wondered what it felt like to move to a country where you didn’t grow up. I had thought about that often since my sister got married. Do you become a character in a story native to that land, or do you, somewhere in your heart, want to return to your homeland? (87)

(伊訳) 生まれ育ったのと違う国に住むというのはどういう感じだろう？時間とともにその場所に主人公になりながら溶けていくのか、それとも、心のどこかでいつの日か故郷に帰ることを望み続けているのか？

Cosa si proverà a vivere in un paese diverso da quello dove si è nati e cresciuti? Col tempo ci si assimila a quel posto, diventandone il protagonista, oppure in qualche parte di sé si continua a sperare di ritornare in patria un giorno? (78-9)

生まれ育ったアメリカから日本に移ってきた咲や乙彦について、風美が考えている文章。これは、イタリア語訳で原文の「姉が結婚してからよく考えた。」の文章が省略されている。イタリア語訳で省略が行なわれた珍しい例である。

- ⑨ ゼリーみたいに現実が遠のく。ゆがんで、実感がなくなる。(108)

(英訳) しかしそのうち現実が遠のき始め、全てがぼやけて非現実的に感じられる。

But then reality starts to creep away, and everything goes fuzzy, and it feels unreal to me. (88)

(伊訳) そのうち具体的世界がゼリー状になり遠のく。現実の感覚が変化し、消失する。

E intanto il mondo concreto diventa gelatinoso e indietreggia. Il senso della realtà si altera e scompare. (79)

翠が現れてからの風美の実感を描写した文章。英

語訳では原文の「ゼリーみたいに」が省略されているが、イタリア語訳は「現実がゼリー化し」と忠実に訳されている。

⑩ じゃあ、魅力って何だろう？

と、思った。あのずれ具合や、自立している才能の、自己充足的な何か。他者とは決してわちあえない、彼女自身だけの内面の苦悩のようなもの。数人にしか通じない強力な合言葉。
(149)

(英訳) 私を彼女に惹きつけるものは何だろう？彼女の自己充足性、自立できる能力だろうか？もしくは、彼女の苦悩の独自の原因、彼女を他人の痛みから離す何かだろうか？

What was it that attracted me to her? Was it her self-sufficiency, her ability to stand on her own? Or the unique cause of her suffering, something that set her apart from other people's pain? (124-5)

(伊訳) じゃあ、彼女の魅力って何だろう？と自問した。おそらく、エキセントリックな何か、独立した何か、彼女を他者と区別する自立的な何か。他人とは分かち合えない、自分の内面で一人で苦しまねばならない何か。数人とだけ通じ合える強力な合言葉のような。

Allora qual è il suo fascino? Mi chiesi. Forse quel qualcosa di eccentrico, di indipendente, di autonomo che la distingueva. Qualcosa che era impossibile dividere con gli altri, di cui doveva soffrire da sola dentro di sé. Come una parola d'ordine così potente da poter essere comunicata solo a pochi. (106)

翠は普通の人のはずなのに、どこが人と変わっているのかを分析している文章。ここは、原文に独特な言葉使いが目立ち、かなり訳しづらいと思われる。英語訳では、原文の「数人にしか通じない強力な合言葉。」の部分が省略されている。

翻訳の傾向

以上、いくつかの翻訳例を比較した。そこから傾向として言えることは、英語訳は原文を削除したり態を変えたり意識をしたりする部分が多いのに対し、イタリア語訳は、全てではないが比較的原文に忠実に訳しているということである。確かに吉本ばななの文章は、比喩が独特であったり、主語や目的語が省略されたり、自由間接話法が用いられたり、読者による解釈が必要な箇所が多数見られる。それを外国語話者に伝わるように移し変えるためには、ある程度の訳文の変更はどうしても必要であろう。翻訳は原文をそのまま写す鏡ではないので、異なる言語に訳す以上、原文がある程度の変更をこうむるのは避けられないことである。この作品の翻訳に対する訳者の姿勢の違いは、英語訳のように読者にわかりやすい翻訳を目指す読者重視・訳文重視主義と、イタリア語訳のように原文を忠実に翻訳することを目指す原文中心主義との違いとなって現れていると言えよう。

この二つを両立した翻訳にするのは困難であるため、翻訳者はどちらか一つの姿勢を取らざるを得ない。ただ、この作品『N・P』の翻訳に限って考えると、どちらの姿勢が望ましいであろうか。

言葉の機能

それを判断するために、この『N・P』という小説における言葉の機能や働きについて考えてみたい。

吉本ばななの作品には、社会的にタブー視されている要素（近親相姦、同性愛、自殺、離婚、ジェンダーやセクシュアリティの逆転、霊的なもの、オカルトなど）が多く取り入れられている。これらは、キリスト教圏、特にイタリアのようにカトリックが大半を占める国では道徳的もしくは生理的に受け入れられない要素と言える。『N・P』においては、翠という登場人物がこうした要素を一手に引き受けている。具体的には近親相姦や、自殺・心中への衝動、性的奔放さなどであり、また同性愛の可能性も暗示されている。そして物語の最後で彼女は、自分の異母兄弟の子供を身ごもって姿を消す。こうし

たインモラルな負の要素を全て背負って、彼女は物語の最後で、不在という沈黙の状態に追いやられる。このような、タブー・禁忌とされている事柄は、一般的には口に出しづらいという特徴がある。「口にするのはばかられる」という言い回しがあるが、これは、道徳的・社会的・性的に逸脱した事柄を言語化したり発話したりすることは避けるべきであるという観念を反映した言葉である。

こうした沈黙・不在の代理表象という役割を担う一方で、翠は、近親相姦の結果出来た子供を産んで育てようと決意する。つまり、彼女がどこかでは生きていて、前へ進んでいることが示されてもいるのである。物語はこの状態で終わるので、翠がその身に帯びる道徳的・社会的・性的逸脱に結論や価値判断が下されることはない。作者がこの本のあとがきで「翠を、読む人によって最低の女にも菩薩にもなるような存在にしたかった」(233)と述べているように、翠が象徴する逸脱には多義的解釈が可能であると考えられる。こうして、一見プロブレマティックな要素をあえて言語化しないことで、タブーを否定も肯定もしない結末になっているのである。

同じくあとがきで、『N・P』のテーマの一つがテレパシーとシンパシーであると述べられているが、これは、言葉の機能が介在しないところで人間同士がつながる可能性を示唆している。つまり、言葉が人間にとっての全ての意味や価値を決定してはいないというのが、この作品で描かれている世界であると思われる。

以上の点から、この『N・P』における言葉の在り方とは、万能でも絶対でもなく、むしろ不完全で曖昧なものだと言える。作品全体における言葉使いも、独特であったり、いまひとつ理解しづらかったり、読みにくかったりというように、言葉の不完全性そのものを反復しているかのようである。

こうした特徴を持つテキストを外国語に翻訳する際も、その言葉に出来なさや伝わりにくさを反映した訳にする方が、原文の本質を捉えていると思われる。つまり、この場合は、原文のスタイルを忠実に訳文に移したイタリア語訳の方が適しているのではないだろうか。読者のために、最低限の意識や変更は確かに必要ではある。しかし、例えば⑥の「その人がその人である不幸みたいなもの。」という文章を、英語訳のように「皆、不幸を持っている」と

いった、わかりやすく普遍性のある解釈に還元してしまうと、原文の独自性や世界観が失われかねない。あえて直訳にするべき文章を見極めることも、翻訳において必要な作業であると思われる。

終わりに

翻訳に対する姿勢は、訳者により異なるが、決まった正解は存在しない。読者にわかりやすい翻訳を目指すとは原文の雰囲気やリズムを残すのが難しくなり、一方、原文に忠実に訳すと読者にとってわかりづらい訳文になるというリスクが発生する。どちらを取るかは翻訳者の選択によるが、吉本ばななのこの作品に関しては、イタリア語訳のようなアプローチが適当だと思われる。翻訳をする際は、原文の特徴を把握した上で訳し方を決定するのが望ましいのではないだろうか。

参考文献

- 1) 吉本ばなな 『N・P』 角川書店、1990
- 2) Yoshimoto, Banana *N.P.* translated by Ann Sherif, Faber and Faber, London, 1994
- 3) Yoshimoto, Banana *N.P.* traduzione di Giorgio Amitrano, Giangiacomo Feltrinelli Editore, Milano, 1992
- 4) Venuti, Laurence *The Translator's invisibility.* London & New York: Routledge, 1995
- 5) E. G. サイデンステッカー、安西徹雄 『日本文の翻訳』 大修館書店、1983
- 6) ハッチャー保子、小説『キッチン』英伊独訳の比較分析、福岡大学人文論集、pp.1125-58、2000
- 7) 大澤吉博、現代日本文学英訳におけるテキスト操作—吉本ばなな『キッチン』英訳を例として、外国語研究紀要、東京大学大学院総合文化研究科外国語委員会刊、pp.1-14、2001
- 8) 「文学界」 1993年8月号 イタリアの吉本ばなな (P.130 - 133) 文芸春秋社
- 9) 「国文学—解釈と教材の研究」 1994年2月号 特集：吉本ばなな 学灯社